

小樽市塩谷における地域共生社会の実現

—行政と協働した生活満足度調査—

北海道大学大学院環境科学院

環境起学専攻 実践環境科学コース

菅野 賢人

近年、高齢化や単身世帯の増加、社会的孤立などの影響により、人々が暮らしていくうえでの課題は、様々な分野の課題が絡み合って「複雑化・複合化」している。このような人々の暮らしの変化や構造の変化を踏まえ、人々が様々な地域生活課題を抱えながらも、住み慣れた地域で自分らしく暮らしていけるよう、地域住民等が支え合い、一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともにつくっていく「地域共生社会」の実現に向けた体制整備などがすすめられている。

本研究では、地域共生社会の実現に向け、関係者間でも地域に対する認識の差異があると考え、より根本的な部分での考え方や認識の違いを明らかにすることで、地域共生社会の実現に向けた新たな視点を見つけることを目的とする。北海道においては特に人口減、過疎化による地域コミュニティ消滅が危惧されており、小樽市もその一つということで、本研究を開始した。2022年5月～2022年11月にかけて小樽市塩谷地区に関係する25名に対し、1対1で半構造化インタビューを行い、塩谷地区の魅力や課題について自由に語ってもらった。インタビュー内容は質的データ分析法(佐藤 2008)に沿い、更に抽象的な概念へと高度化させ分析を行った。

分析から、年代や性別、居住環境を問わず、ほとんどの人が交通の便が悪いと訴えていたが、一言で交通の便が悪いと訴えても、その詳細は居住環境や年代によって異なっており、海側に住む人は「病院までバス一本でいきたい」山側に住む人は「坂の上までバスが来てほしい」学生は「市内に気軽に出かけたいので、運行本数を増やしてほしい」など、要望は多様であった。以上のことから、住民同士がお互いについて知ることが必要であると考え、住民同士お互いにどんな人たちがいるのかについて知ること、地域の魅力を共有することを目的としたワークショップを2022年12月4日実施した。実施後の聞き取りから、地域には多様な人たちが存在し、今回のワークショップの開催で、地域の実情に即した意思決定を行っていくためには、地域の代表者だけではなく、多世代の参加が求められることが分かった。また、地域共生社会の実現に向け、課題について早急に議論をすることもできるが、魅力について意見を交わす内容でワークショップを開催することで、地域に住む多様な方々に地域について考えるきっかけを持ってもらうことができた。地域の魅力について考えることが、必ずしも直接的な課題間の解消にはなるかどうかについては現段階では分からない。今回、地域に住む多様な方々に地域について考えるきっかけを持ってもらうことができたことから、今後もこのようなワークショップを地域主体で持続的に行っていくことが地域共生社会の実現に向けて重要であると考えられる。